

「楽派」概念の成立：美術史と18世紀の総合音楽史および国民様式論との接合

朝山 奈津子 (弘前大学)

本発表では、音楽史記述における「派」(以下、楽派)の語について、その導入の契機を美術史記述から辿り、また音楽の「様式」概念との関係を検討しつつ、とりわけ「楽派」が地名と結びついて定着した過程を明らかにする。

「楽派」は作曲家群を意味し、音楽家自身が名乗るよりも、後世に歴史家が名づけるものである。音楽史には、フランス＝フランドルないしネーデルラント、ローマ、ヴェネツィア、ナポリ、マンハイム、ヴィーンなどの「楽派」が登場する。「楽派」は、17世紀まではイタリア、18世紀以降についてはドイツの都市が多い。またこれらの地名は、作曲家の出身地域、音楽家の集まった都市など、さまざまな意味合いを持つ。その妥当性やカノン化の経緯はすでに再考され、地名が各「楽派」の実態を反映しないことが指摘されている(Lang 1939, Robinson 1972など)。しかし、そもそも「楽派」を意味する単語 school/scuola/Schule/école/scola 自体は、土地や場所のニュアンスを含んでいない。一般的には、様式や技法の名称、人名、またジャンル名と連結した用法もありうる。地名との結びつきはどのように形成されたのだろうか。本研究は、地名の妥当性を巡る議論からは見えてこない根本的な問題を探るものである。

「楽派」の区分によって15-16世紀の音楽史を最初に叙述したのは、バーニーの『総合音楽史』(1776-1789)だった。彼は「イタリアの美術家と同様に音楽家にもさまざまな派 schools が当てはまる」(III: 185)として、美術史から「派」を援用し章立てに用いたが、音楽史における「派」の定義や成立要件を詳しく述べなかった。

そこで本発表ではまず、ヴァザーリ『画家・彫刻家・建築家の生涯』(1550)以来の美術史の「派」概念を先行研究に基づき整理する。次に18世紀までの主な音楽史書のなかで、とりわけ国民様式を巡る言説を概観したのち、バーニーの叙述を検討する。これと同時期のシューバルト「音楽美学の構想」(1784/85)、および18世紀末からフォルケルの『音楽通史』第2巻(1801)に至る事典項目や歴史記述も参照し、キーゼヴェッターの「論考」(1829)と『西洋音楽史』(1834)における「楽派」概念の批判までを本発表の射程とする。

これら資料を通じて、「楽派」概念が音楽史に定着する過程が明らかになる。すなわち、当初は英国の音楽史家がイタリア・ルネサンス音楽を語るための型として採用したが、その後、独語圏の音楽史記述においてナショナリズムを主張する装置となってゆく。

背景には美術史の原初的な文脈があり、またネーデルラント連合王国主催の音楽史論文の公募（キーゼヴェッター1829が一等賞）が転機をなしたことを指摘する。